第２章　立地と環境

１．地理的環境
（１）芦北町の位置
（２）芦北町の地形、地質
（３）芦北町の気候
（４）芦北町の生態系
２．社会的環境
（１）地域の成り立ち
（２）人口
（３）交通
（４）産業
（５）土地利用
３．歴史的環境
（１）旧石器～縄文時代
（２）弥生～古墳時代
（３）奈良～平安時代
（４）鎌倉～戦国時代
（５）近世
（６）近代～現代

第２章　立地と環境

１．地理的環境

（１）芦北町の地理的位置

芦北町は熊本県の南部、葦北郡のほぼ中央部に位置し、八代海（不知火海）に面している。町域は、東西 16.6 km、南北 25.4 km、総面積 233.81 ㎢で、北側の八代市、南側の水俣市、津奈木町との境を山々に隔てられ、東側は球磨川を境に球磨郡球磨村、西側に不知火海を挟んで天草諸島がある。海岸部まで山が迫る地形は陸上交通を阻害する要因であり、特に赤松太郎峠・佐敷太郎峠・津奈木太郎の３つの峠を総称して呼ぶ「三太郎峠」は難所として知られたが、近年、南九州西回り自動車道の供用開始によりアクセスは大幅に改善された。町中心部から熊本市へは北へ 74km、八代市へは 32 km、鹿児島県境の水俣市へは南へ 22 km、人吉市へは東へ 40 km で、近隣都市へは自動車で１時間前後の距離である。

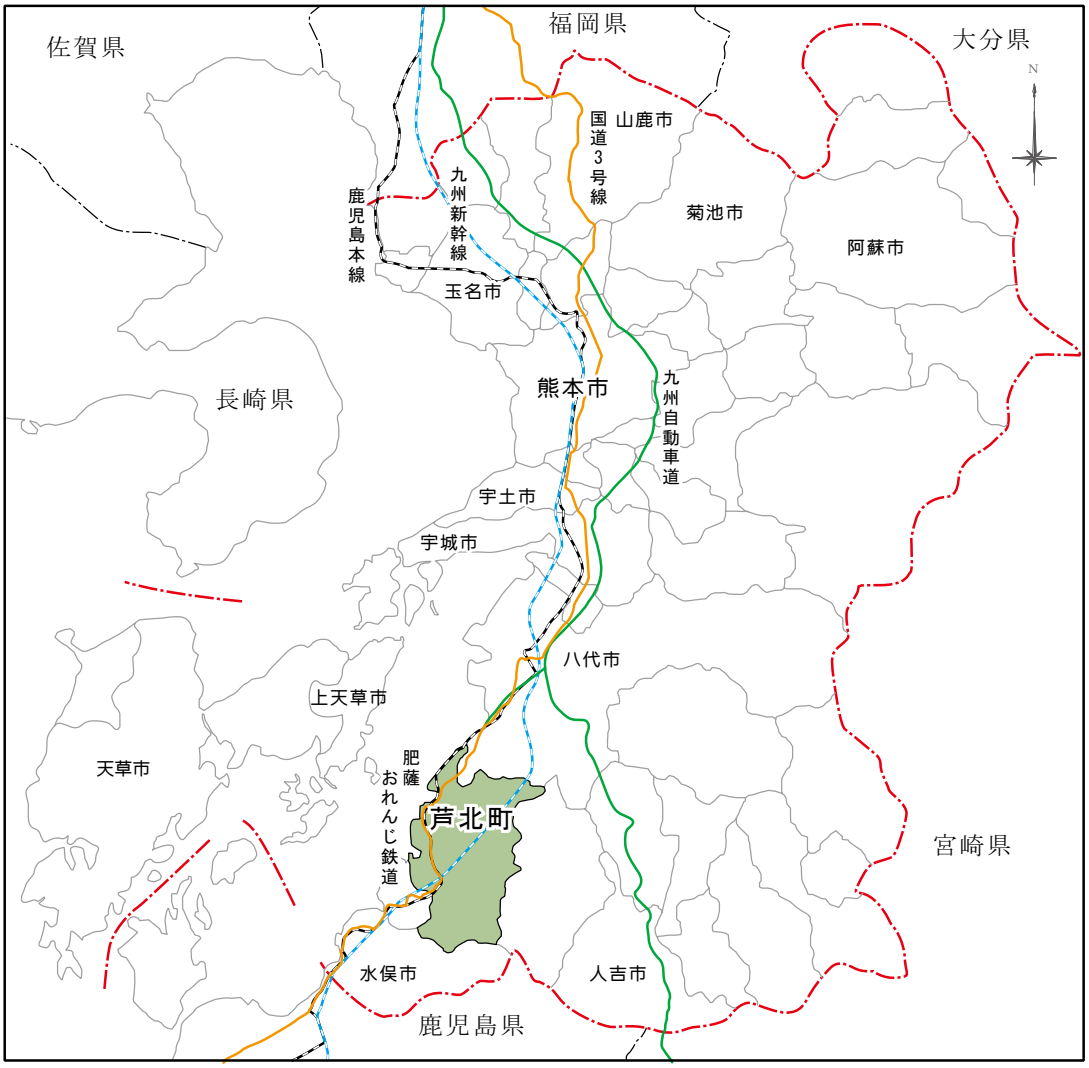


図 2-1　芦北町位置図

（２）芦北町の地形、地質

町域の南端、水俣市との境には葦北郡内最高峰の大関山（標高 901.9m）を中心とする標高 800m～900m級の山地があり、ここを水源とする二級河川である佐敷川・湯浦川は河口部で合流し八代海に注ぐ。佐敷川は藍川、七瀬川の別称を持ち、また佐敷川を男川、湯浦川を女川とも呼ぶ。

海岸部は、九州山地が八代海に沈降して形成された沈水性の標式的なリアス式海岸で、岬や入り江が続く変化に富んだ景観を見せ、昭和 56 年に指定された芦北海岸県立公園の一部を構成している。海岸平野の発達は悪い。

町内陸地の約 75%が丘陵地で、台地・段丘・谷底平野の発達も悪く、佐敷・湯浦両河川流域にわずかな平地が形成されている。なお、河口部付近の計石、白岩、花岡、芦北、平生地区では、江戸時代後期から明治にかけて干拓新地が多数造成されている。

芦北町内の丘陵地の形態は、北部と南部でやや異なり、北部は九州山地の西端部にあたり、急斜面が発達して小規模な沢と尾根が多く見られる。特に球磨川沿いの地域の山稜は急峻である。南部は肥薩山地（国見山地）の西端にあたり、山地の標高差が小さい。比較的緩傾斜面が多く、浅い谷が発達している。

地質的にも北部と南部は異なり、北部は人吉・球磨地方と同じく古生代・中生代の堆積岩類（秩父累帯）が分布し、南に向かって順に黒瀬川構造帯（シルル紀～白亜紀）・三宝山帯（下部三畳紀～上部ジュラ紀）となる。南部は、肥薩火山区に属する火山の噴出物（新生代の火山岩類）が地表を広く覆っている。

芦北海岸（リアス式海岸）

球磨川

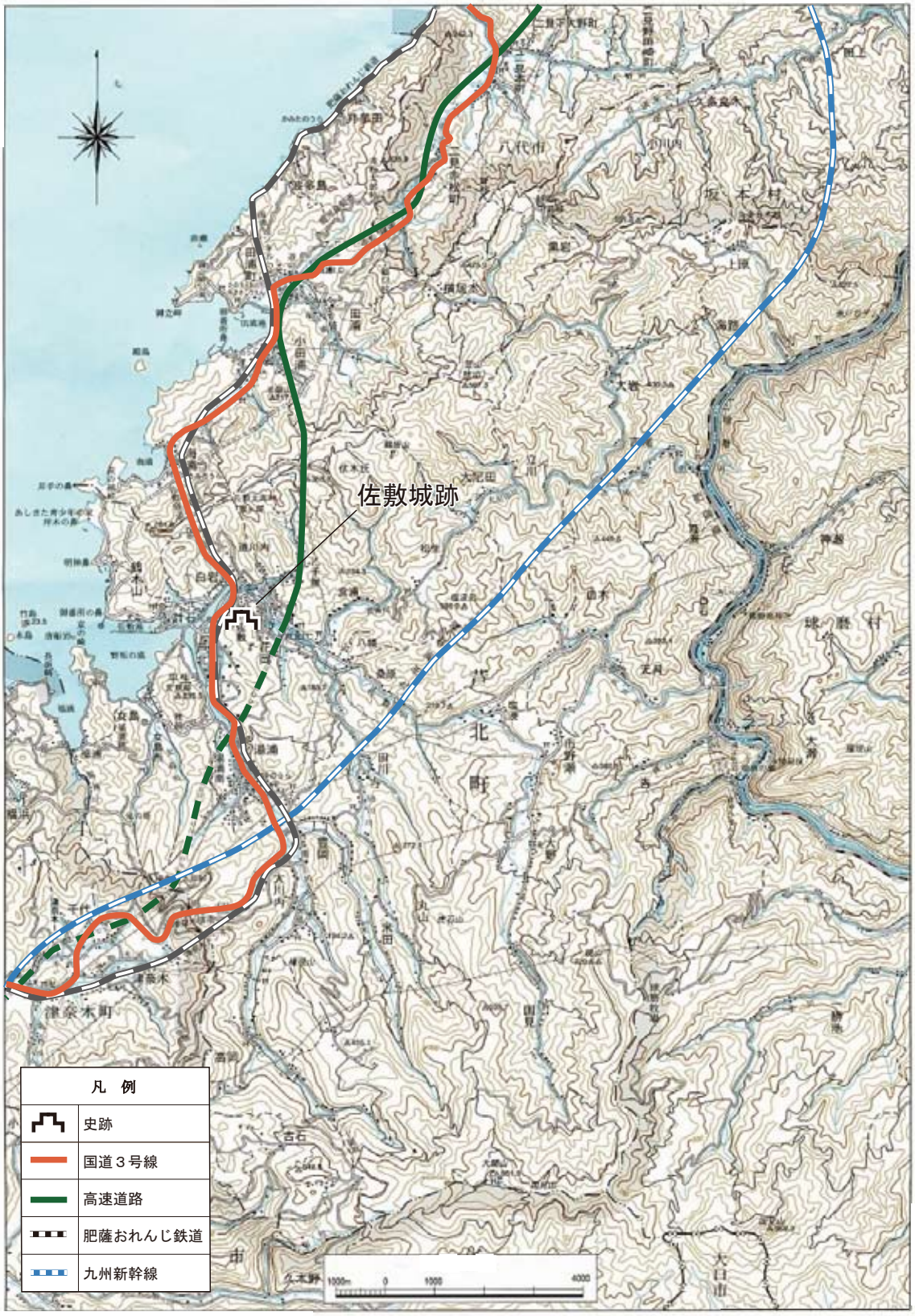


図2-2　芦北町全図

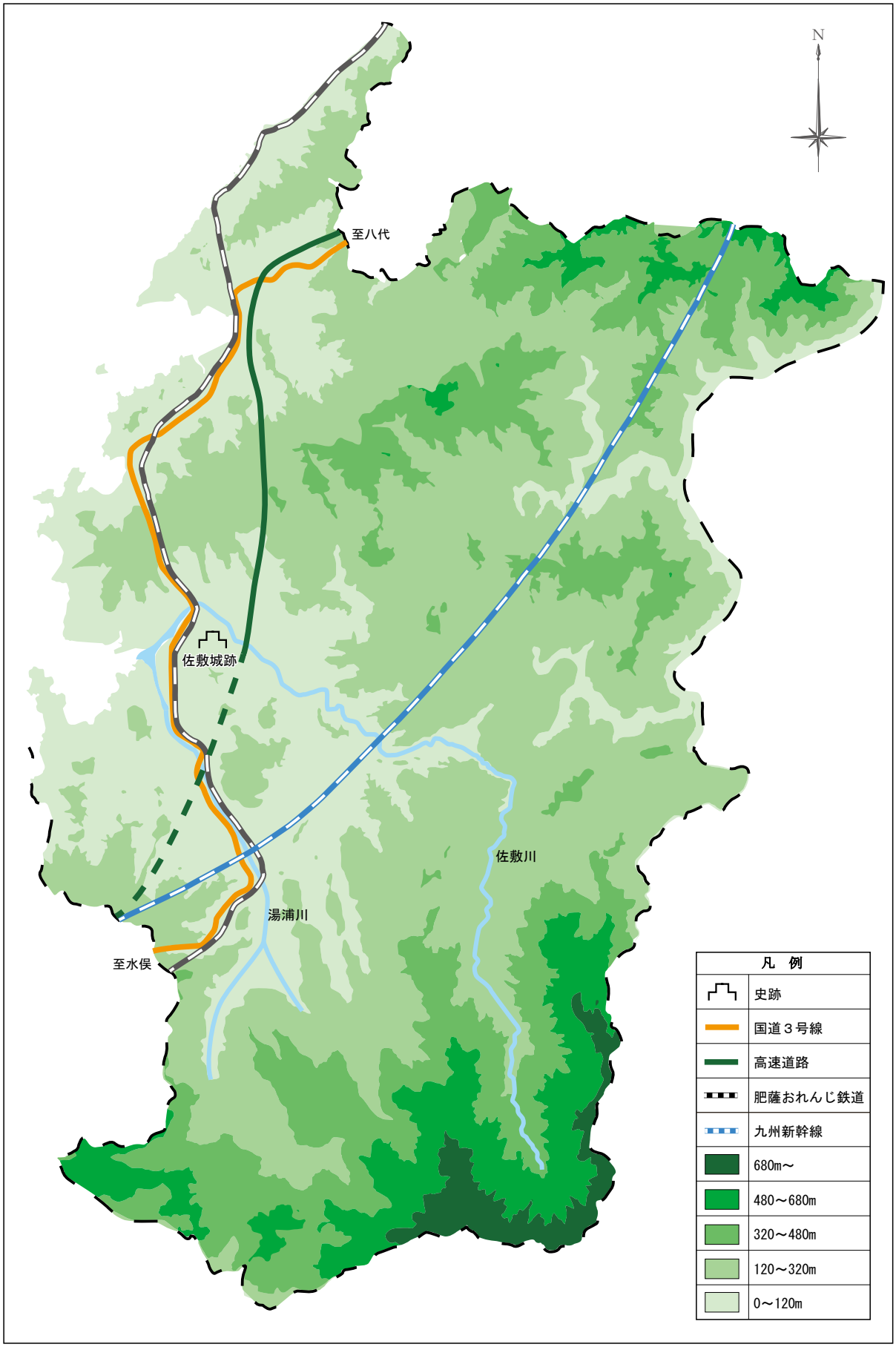


図2-3　芦北町の地形条件図

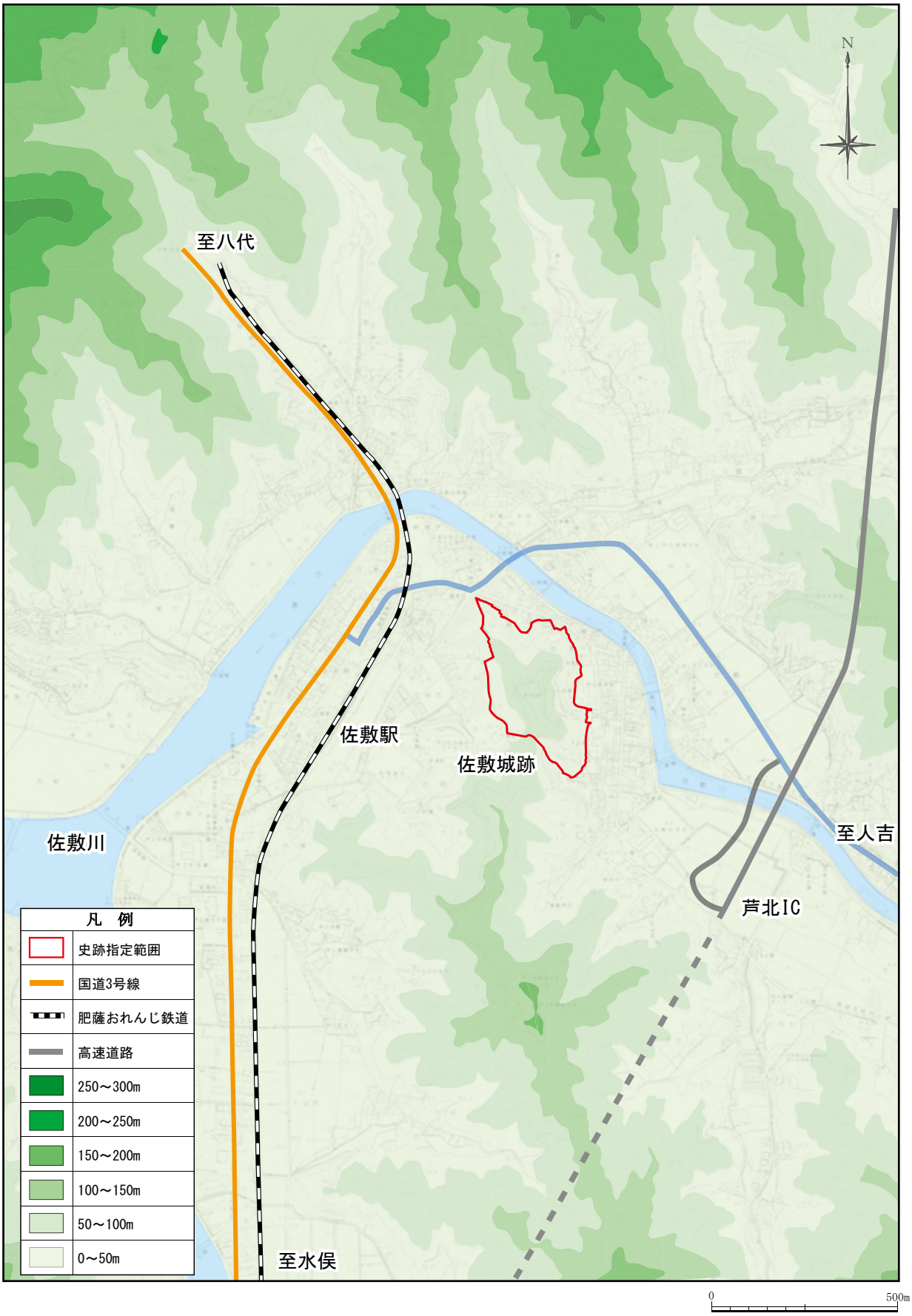


図2-4　佐敷城跡及び周辺の地形図

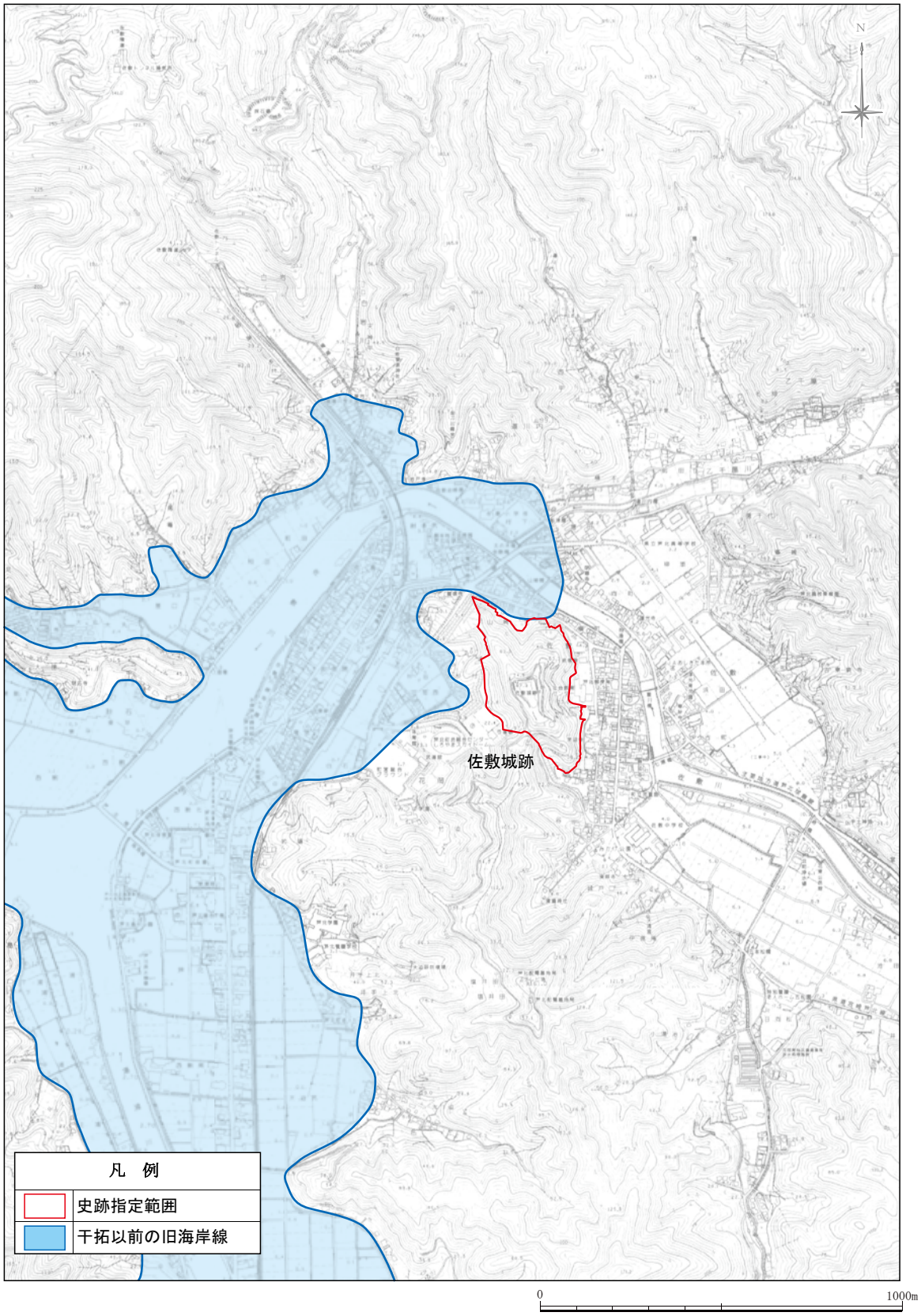


図2-5　干拓以前の旧海岸線想定図

町西側の八代海南部海底には、日奈久断層帯が確認されており、平成 25 年 2 月に政府の地震調査委員会が発表した長期評価では、マグニチュード 6.8～7.5 程度（全体が連動した場合はマグニチュード 7.7～8.0）の地震が発生する可能性が推測されている。北東方向に南阿蘇村まで伸びる活断層帯である布田川断層と連動した場合、規模はマグニチュード 7.8～8.2 に拡大すると見られている。

なお、1923 年以降、布田川・日奈久断層帯ではマグニチュード 6.0 を越える地震は発生していないが、2009 年 8 月 3 日から 6 日にかけて町内を震源とするマグニチュード 4.3～4.7 の地震が発生しているほか、1997 年 5 月 13 日発生の鹿児島県北西部地震（マグニチュード 6.4）では、芦北町では震度 4 を記録している。

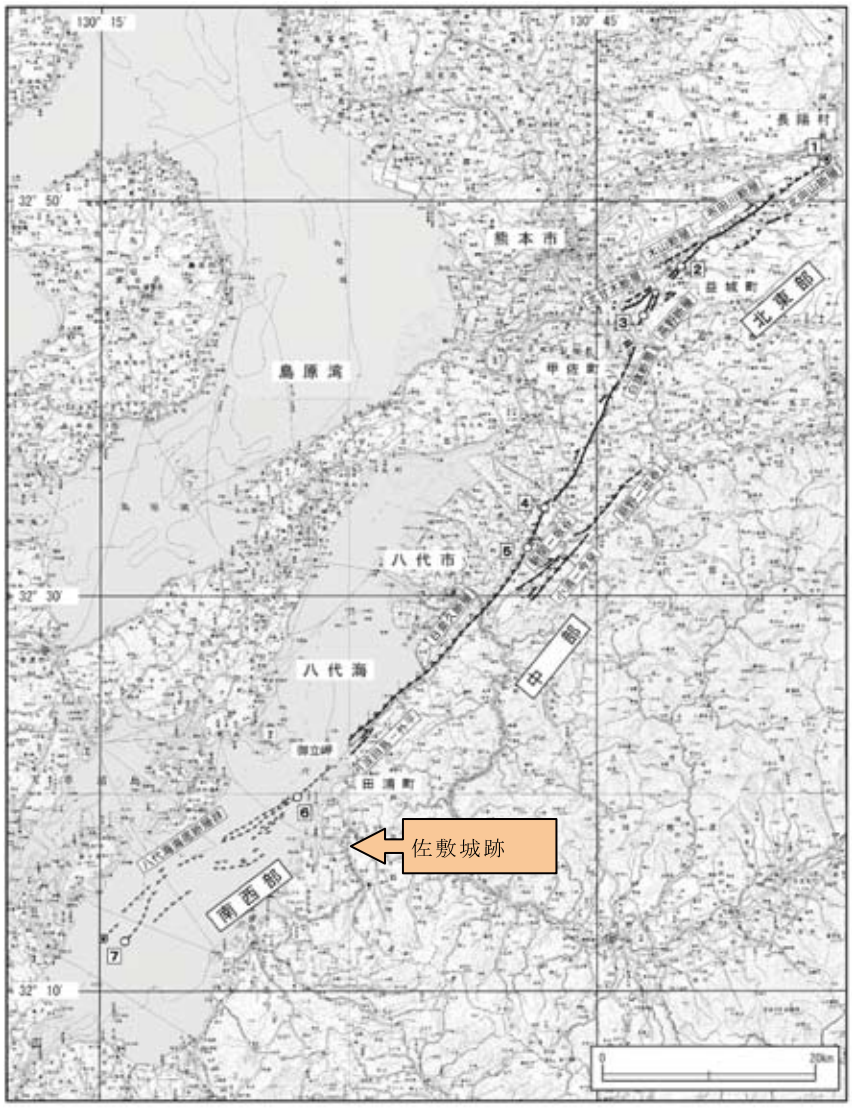


図 2-6　布田川・日奈久断層図（地震調査研究推進本部 HP より）

（３）芦北町の気候

熊本県は、県内全域が太平洋側気候に属し温暖であるが、冬と夏との寒暖の差が激しいといわれる。一方で、芦北・天草地方は海洋性気候で、年間における寒暖の差は小さい。芦北町内では、海岸地域と山間地域では条件が異なっており、海岸地域は暖

流の影響により暖かく、ほぼ無霜地帯であるのに対し、山間地域は降雨量、湿度ともに多く、比較的冷涼な気候となっている。年間平均気温は 17～18 度、降雨量は 2,000 ㎜前後となっている。

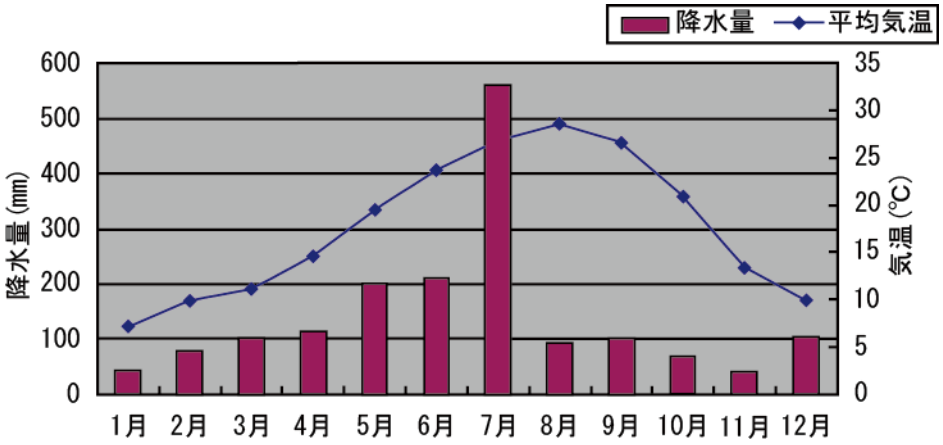


図 2-7　芦北町の月降水量と月平均気温（平成１９年度）

（４）芦北町の生態系

環境省が行った自然環境保全基礎調査によると、植生ではスギ・ヒノキ植林のほか、ヤブツバキ、シイ・カシ萌芽林が見られる。また、特定植物群落調査によると矢城山のスダジイ群落、御立岬のウバメガシ群落などの自然林も点在している。目視調査では、自生植物約 1,200～1,300 種、帰化植物約 200 種が観察され、特徴としてブナ科のカシ類が多く、ヤブツバキ、ツワブキ等の海岸海洋性の植物が目立つ。メジロホオスギの群生、タマミズキ、ハマセンダン、紅白のシランの群生、エビネ等のラン類も自生している。河川の水草は外来種のオオカナダモが占有し、在来種が姿を消しつつあり、近年、地元芦北高校によるアマモ藻場育成が佐敷湾で図られている。

アマモ藻場育成作業

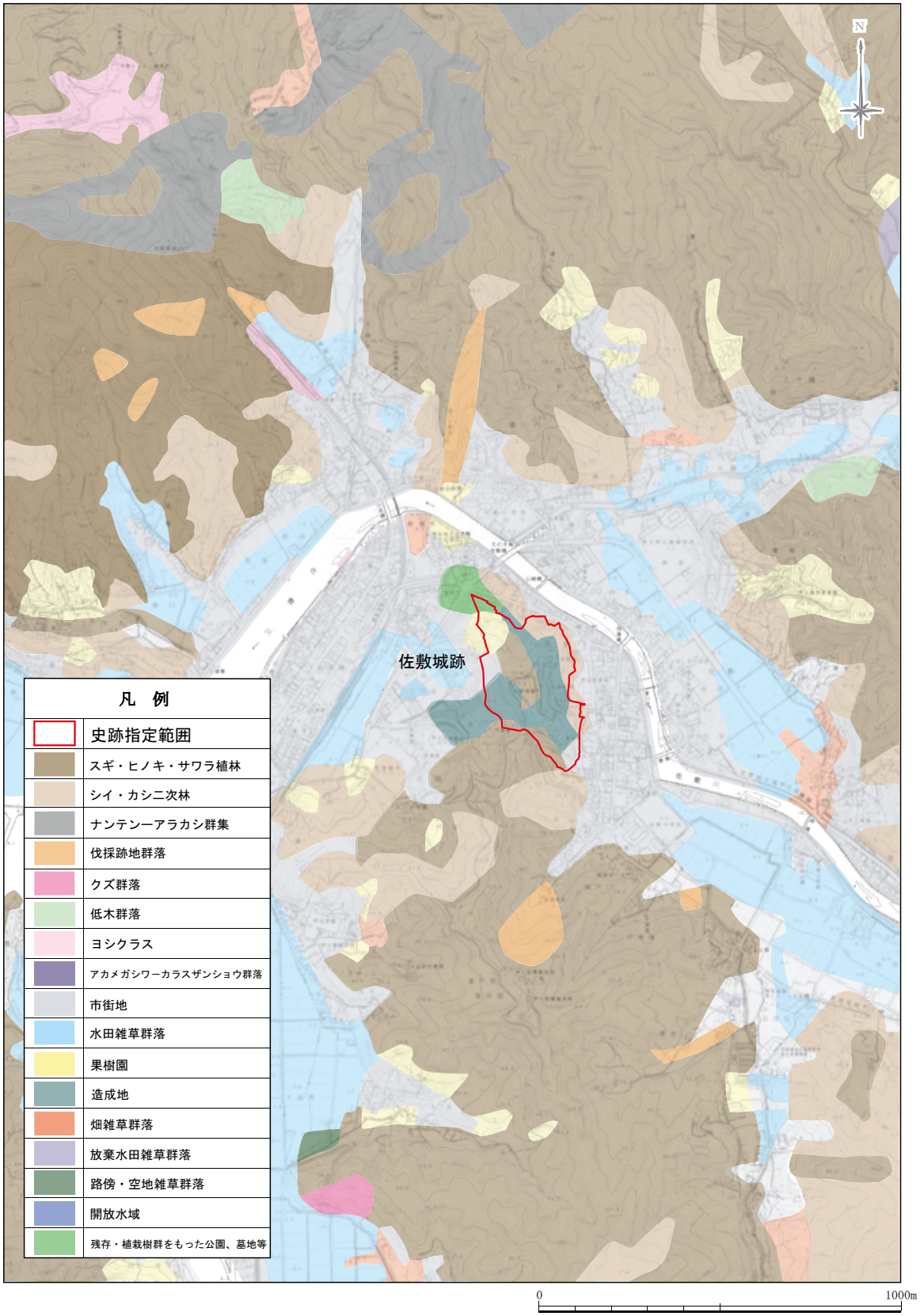


図2-8　芦北町の現存植生図

動物類は、前記環境省調査によると、淡水産・陸産貝類が 56 種、昆虫 31 種、淡水魚類 16 種、哺乳類 13 種確認されている。

町内には、ニホンイノシシやニホンジカが多く生息し、近年、山間部での食害が深刻化している。ニホンザルも民家周辺に出没している。チョウセンイタチなど外来種による被害も報告されている。

鳥類は 49 科 165 種が目視確認され、サギ、カモメ、カモ類が増加している。特に田浦、佐敷の港湾部では 1,000 羽以上のユリカモメが群れ、湯浦川、佐敷川の下流部では約 500 羽のヒドリガモ、カルガモが見られる。

海水魚類では、特産となっているタチウオやエビ類のほか豊富な魚種が観察され、時折、イルカやスナメリ、サメ類も見られる。平成 18 年にはアカウミガメの産卵が確認されている。

なお、芦北町は、平成 13 年 10 月に熊本県下では唯一「ほたる保護条例」を制定し、8ヶ所の保護区域内でゲンジボタル、オオマドボタル及びカワニナを積極的に保護しており、毎年、全国で最も早くホタルの出現が観測されている。

タチウオ

ゲンジボタル

２．社会的環境

（１）地域の成り立ち

芦北町は、万葉の時代から「葦北の国」として知られ、古くから九州南部への海陸両路の重要な拠点であり、近世には肥薩国境の要衝の地であり、県南の政治・経済・文化の中心として発展した地域である。

明治 22 年、市町村制の制定により、田浦村、佐敷村、大野村、吉尾村、湯浦村が誕生した。明治 36 年に佐敷村が町制を施行し、昭和 30 年 1 月に佐敷町、大野村、吉尾村が合併し葦北町が誕生した。湯浦村は昭和 26 年に町制を施行し、昭和 45 年 11 月に葦北町と湯浦町の二町が合併して芦北町が誕生した。一方、田浦村は昭和 33 年に町制を施行し、平成 17 年 1 月 1 日に芦北町と田浦町は二町合併を果たし、「芦北町」として現在に至っている。

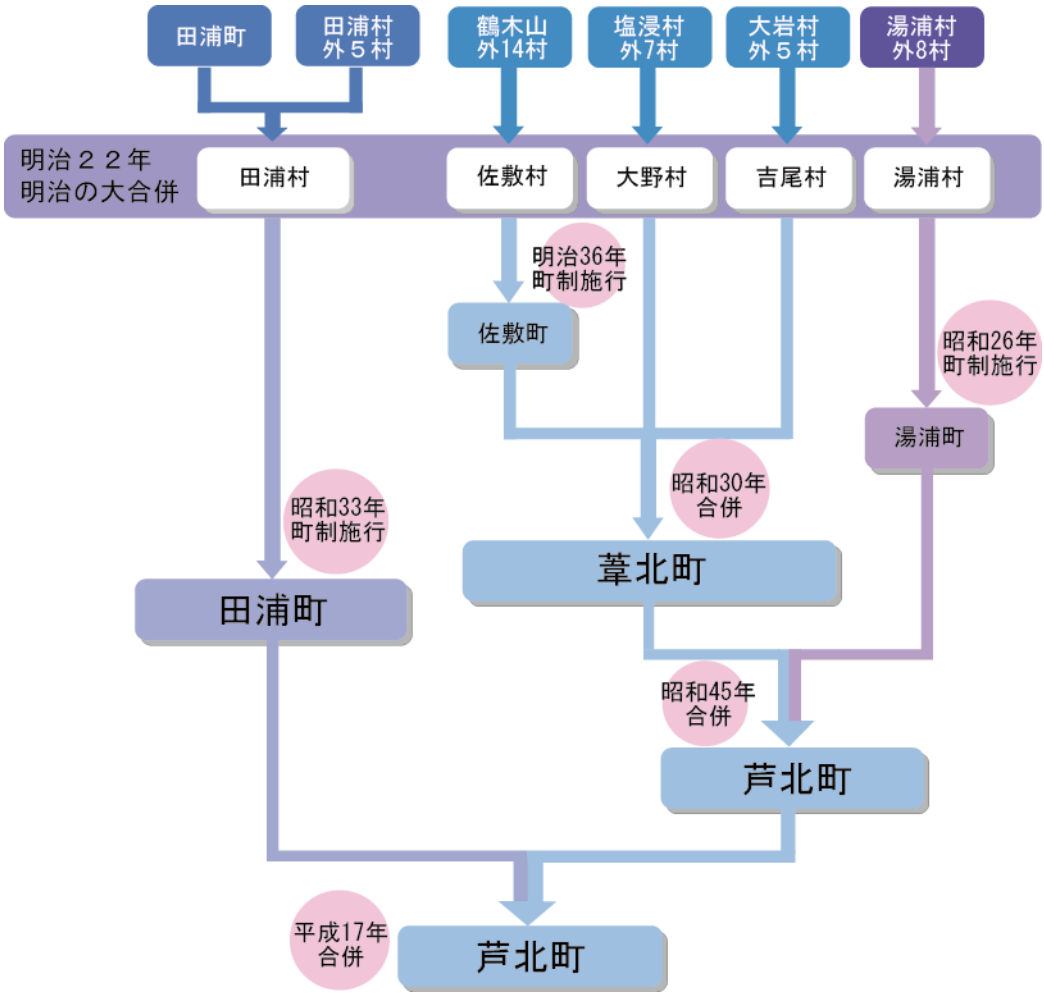


図 2-9　芦北町の市町村合併図

（２）人口

現町域内での人口は、昭和 35 年の 35,777 人をピークに減少の一途をたどっており、現在は 19,965 人（平成 23 年 5 月末時点）と昭和 35 年と比較して、約 45%減少している。少子・高齢化が進んでいく中、今後も減少していくことが予測され、平成 47 年の人口は 10,697 人との予想が出されている。

高齢化も深刻で、65 歳以上の高齢者が人口に占める割合は 34.9%（平成 21 年）に達し、全国平均の 22.1%、熊本県平均の 25.1%を大きく上回っている。高齢者人口の増加に伴い、要援護高齢者（寝たきり高齢者、認知症高齢者、虚弱高齢者）も増加傾向にある。65 歳以上の高齢者を支える生産年齢人口割合も、高齢者 1 人当たり平成 17 年の 1.66 人から平成 47 年には 0.78 人と、約半分になることが推計されている。

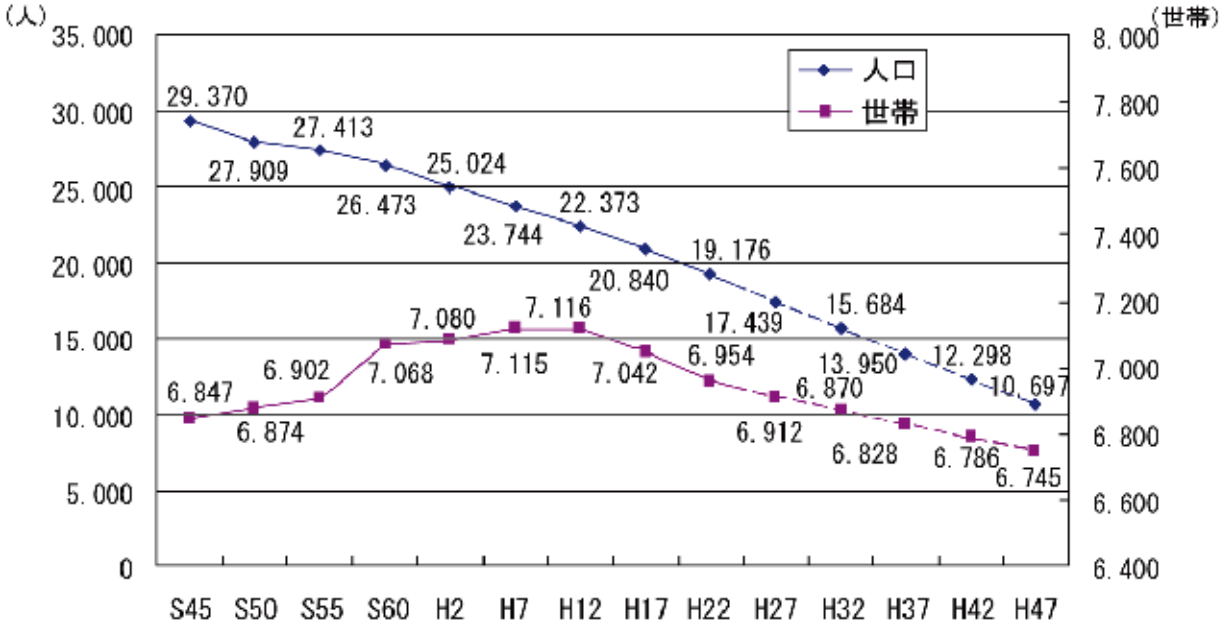


図 2-10　芦北町の人口及び世帯数の推移

（３）交通体系

本町の幹線道路には、南北を縦貫する一級国道 3 号と、人吉・球磨方面へつながる主要地方道芦北球磨線がある。また、南九州西回り自動車道田浦インターチェンジが平成 17 年 2 月に、芦北インターチェンジが平成 21 年 4 月にそれぞれ供用を開始している。高速交通網の確立による地域産業への好影響が期待されるところであり、本町においても農産物を始めとして、工業製品の輸送や第 3 次産業、特に観光事業では、九州のほぼ全域が 3 時間足らずで結ばれることになり、産業振興の基盤として期待がかかる。

国道や県道と結ぶ町道は、532 路線、総延長 364km であり、舗装率は 95.6%と高いが改良率は 42.3%と低い状況である。

鉄道については、町の西部を国道 3 号に併行する肥薩おれんじ鉄道に上田浦・たの

うら御立岬公園・肥後田浦・海浦・佐敷・湯浦の各駅があり、町の東部、球磨川沿いを走るＪＲ肥薩線に海路・吉尾・白石の各駅がある。町域を南北に九州新幹線が縦貫しているが、町内に停車駅は無く、車で 30 分前後の距離にある新水俣駅、あるいは新八代駅が最寄り駅となっている。九州新幹線の部分開業に伴い、ＪＲ九州鹿児島本線から経営分離され第３セクターとして運営されている肥薩おれんじ鉄道は、住民の通勤・通学の貴重な交通手段となっている。

路線バスについては、年々乗客数が減少傾向にあり、運行経費を一部補助するなどして路線維持を図ってきた。現在、スクールバスを閑暇時間に定期バスとして運用する「芦北町ふれあいツクールバス」制度の導入等を行っているが、今後も路線の確保に向け、地域住民の大切な交通手段を維持するための方策を講じる必要がある。

町中心部から県庁所在地の熊本市までは北へ 74km の距離があり、近隣の主要都市では八代市は北へ 32km、水俣市は南へ 22km、人吉市は東へ 40km で、車で 1 時間前後の距離である。

南九州自動車道芦北ＩＣ

九州新幹線

肥薩おれんじ鉄道

ふれあいツクールバス

（４）産業

産業別就業人口数からみると、平成 7 年から平成 17 年までの 10 年間に 11,299 人から 9,538 人となり 1,761 人減少している。

産業別の就労人口については、第 1 次産業でこの 10 年間に 644 人と大幅に減少している。また、第 2 次産業においても 1,463 人減少している。

これに対し第 3 次産業では 346 人増加しており、産業構造が第 1 次、第 2 次産業から第 3 次産業へと移行していることがうかがえる。なお、本町の産業別割合は、第 1 次産業 18.2%、第 2 次産業 27.0%、第 3 次産業 54.7%、その他 0.1%となっている。

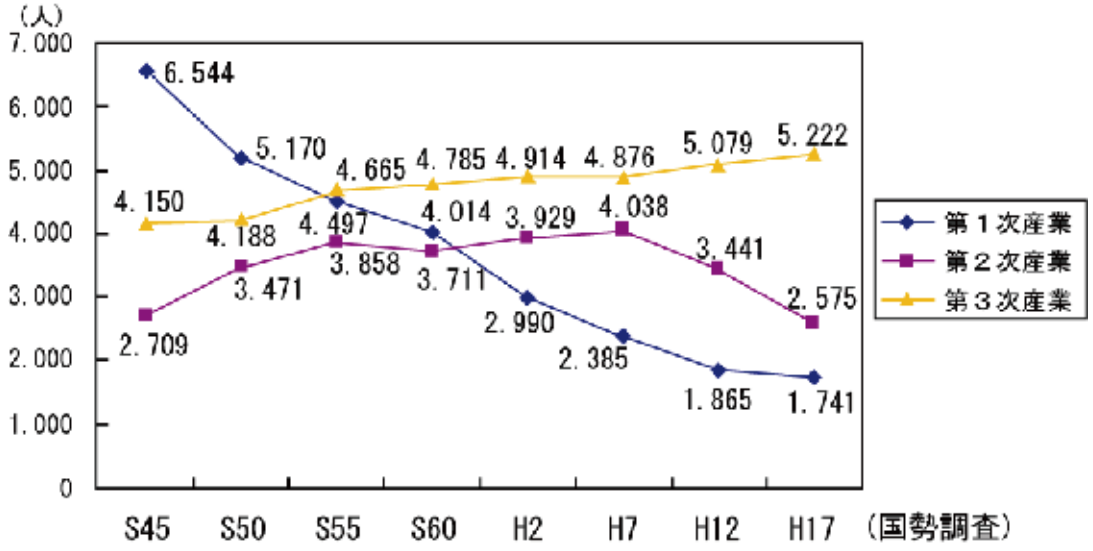


図 2-11　芦北町の産業別就業者の推移

第 1 次産業については、農業経営は、立地条件を生かして甘夏・デコポンなどの柑橘類、水稲、畜産などを主体とする生産を展開してきた。近年では、デコポンハウスなどの施設園芸の導入が行われている。しかしながら、県内で見ると、経営耕地面積も零細で、農業生産額・農業所得額ともに低位にある。

また、林業においても、外材輸入の増大による国内木材価格の低迷による採算性の低下及び林業従事者の高齢化により、山林に対する管理意識の希薄化が顕在化し、管理不足により荒廃する山林が多く見られるようになっている。

水産業は、不知火海を主漁場とする沿岸漁業と球磨川、佐敷川など内水面漁業がある。経営形態は、小規模な個人経営が多く、生産額も減少傾向にあり、苦しい経営状況である。また、後継者不足、高齢化等により、経営体も減少傾向となっている。漁場である不知火海ではうたせ船をはじめとする底引き網漁、地引網漁、刺し網漁、延縄、一本釣り漁、のり養殖などが行われている。魚種は、比較的豊富な種類に恵まれているが、後継者不足による漁船の減少や資源の枯渇化などから漁獲量が減少し漁業経営に大きな影響を及ぼしている。

第２次産業においては、平成 20 年度前半までは好調な受注に支えられ、設備投資や雇用増大が図られてきたが、長引く景気低迷の影響を受け、新規投資の抑制や企業収益の減少など製造業を取り巻く環境は厳しい状況にある。九州新幹線工事や南九州西回り自動車道工事により、一時的に雇用は増大したが、今後の動向には注意が必要である。

第３次産業従事者は、平成 17 年において就業人口比率の半分以上を占めている。本町における商業は、平成 19 年の調査によると店舗数、従業者数、売場面積、年間販売額で平成 14 年と比較して減少している。幹線道路沿いでは、ディスカウントストア、コンビニエンスストアなど時代の需要に対応する店舗の増加が見られるが、佐敷・湯浦・田浦の旧商店街においては、消費者ニーズの多様化・価格競争等への対応が遅れ、商業者の高齢化や後継者不足などにより、依然として厳しい状況下にある。

本町の観光は、御立岬公園や芦北総合海浜公園など芦北海岸を基盤とする海洋レジャーと、豊富な温泉や観光うたせ船のほか、国史跡佐敷城跡などの歴史遺産等に支えられている。レジャー志向の変化に伴う日帰り旅行の増加や宿泊施設の減少に伴い、大部分は通過型の観光形態となっている。

本町の観光客の内訳は、日帰り客が全体の 95%を占め、宿泊客は年間 55,000 人程度しかなく、日帰り客も大部分が海水浴客などの夏期に集中しており、通年型・滞在型の観光スタイルへの転換を図る必要がある。

また、日帰り客の占める割合の増加傾向は、南九州西回り自動車道路芦北インターチェンジ及び九州新幹線の全線開通により、長期間にわたり続くものと推測される。今後、町内の観光資源間の連携を強化し、魅力的な宿泊型観光資源の開発を図る必要がある。

御立岬海水浴場

観光うたせ船

（５）土地利用

本町は、総面積の 78.5%を国有林や民有林等の山林が占めており、以下、田畑等の耕地（7.6%）、宅地（1.7%）と続いている。なお、その他（里道など雑種地）が 12.2%を占めている。

過疎化の進行を起因とする第１次産業人口の減少により、耕作放棄地が増加し、耕地面積は減少する傾向にあり、今後もこの傾向は続くものと考えられる。

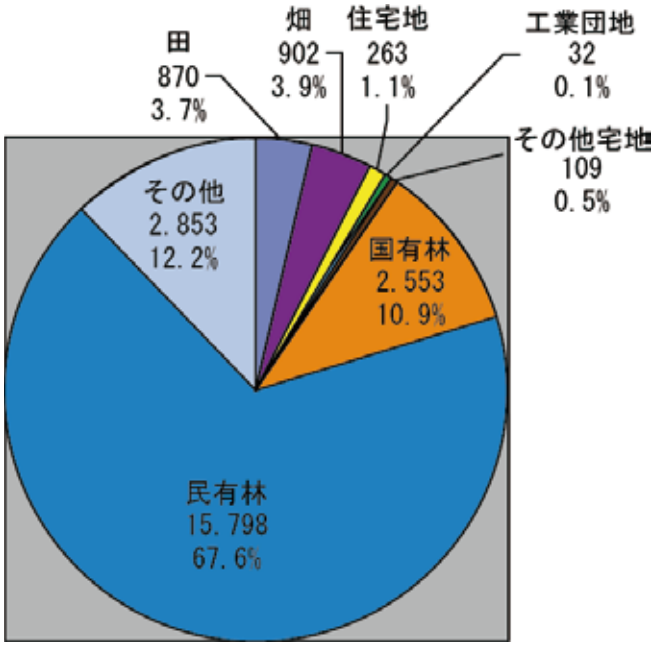


図 2-12　芦北町の土地利用の状況

３．歴史的環境

（１）旧石器～縄文時代

芦北町内では旧石器時代の遺跡、遺物は現在までに確認されていない。

縄文時代の遺跡の大部分は、大関山を源として流れる小河川沿いの細長い独立した谷部で見つかっており、特に町の東部、佐敷川上流部にあたる大野盆地内に集中して存在している。

大野地区には出葉山（テンノクボ、大野）貝塚・向原遺跡・大久保遺跡・中園開拓地遺跡などの縄文時代の遺跡があり、出葉山貝塚では、昭和 41 年の発見の際に縄文早期の押型文土器・縄文後期の土器・石斧・石皿・弥生式土器が発見され、これらと共に多量の海産貝類と獣骨が見つかっている。大久保遺跡では早期の塞ノ神式を中心に、早期押型文・中期の阿高式・後期の出水式土器が出土している。

佐敷城跡の周辺では、城跡より東南 2.1 km地点にある八幡地区の圃場整備工事の際に阿高式・南福寺式土器・出水式土器・御領式土器など縄文中期から後期にかけての土器が出土している。

（２）弥生～古墳時代

町内では、大野地区にある競馬場遺跡、佐敷川と宮浦川の合流点付近にある横手遺跡などの弥生時代の遺跡が確認されており、特に横手遺跡からは弥生時代後期の竪穴式住居が確認されている。

古墳時代の遺跡は、横手遺跡に隣接して宮浦地下式板石積石室古墳群がある。地下式板石積石室墓は、南九州独特の墓制であり、川内川流域・不知火海沿岸・人吉盆地などに多く分布し、芦北町周辺では、水俣市に初野地下式板石積石室墓群（水俣市大字初野）が存在する。宮浦地下式板石積石室古墳群は、昭和 45 年に 3 基が芦北町により発掘調査されたが、調査報告書が未刊行のため詳細は不明である。石室内から鉄鏃・鉄剣などの武器類が見つかり、またその周囲から古墳時代前期（5 世紀頃）の土師器が出土したといわれている。

町域北部の田浦地区海岸部には、未調査のため詳細は不明であるが丸山古墳・鬼塚古墳などが点在している。

そのほか、花岡木崎遺跡の住居跡からは 5 世紀頃の須恵器が出土し、花岡古町遺跡からも 5 世紀頃の須恵器とともに銅製の耳環などが出土している。

（３）奈良・平安時代

古代の葦北郡は「和名抄」によると葦北・桑原・伴・野行・巨野・川田・水俣の 7 郷からなっており、この内、葦北郷・桑原郷の 2 郷が、現在の芦北町内にあったと比定されている。

佐敷は古代から肥後南部における交通の要衝で、延喜式兵部省諸国駅伝馬条には肥後国 16 駅の一つとして、「佐職駅」が登場する。駅馬・伝馬各 5 匹で、伝馬の項には「佐色」とあり、周辺には「馬籠」「中道」など古代道路に関連する地名が残っている。

花岡木崎遺跡出土の墨書木簡から「佐色」「向路次駅」の文字が確認され、佐職（色）駅に関連する出土物として注目されている。同遺跡からは 8 世紀頃の土師器、須恵器を中心に銙帯や唐銭（開元通宝）、墨書土器などが出土しており、古代の官衙遺跡が付近に存在した可能性が高く、その候補地としては佐職駅が最も有力である。

また、万葉集に「葦北の野坂の浦ゆ船出して水嶋に行かむ波立つなゆめ」（長田王）と詠われる「野坂の浦」は、その所在地について複数の説があるが、現在は佐敷湾付近に比定されており、国土地理院発行の 1 ／25，000 地図「計石」（昭和 40 年測量、平成 9 年修正）には佐敷湾内に野坂の浦と記されている。

（４）鎌倉～戦国時代

中世には、古代葦北郡が荘園化して葦北庄となり、その範囲は旧葦北郡一帯と考えられる。荘園成立の時期や経緯、本所、領家などについては不明で、文保 2 年（1318）の「託摩文書（北条高時下文）」に「肥後國葦北庄佐敷・久多良木両浦事」とあるのが、

荘名の初見である。

南北朝から戦国期にかけて、薩摩国牛屎院（現鹿児島県伊佐市）篠原氏の一族が郡内の浦々を根拠として国人化し、「芦北七浦衆」として政治・軍事の両面で集団的な行動を行っていた。

寛正元年（1460）に肥後国守護菊池為邦より相良長続に葦北郡が安堵され、明応年間（1492～1501）に一時、八代の名和氏に葦北郡を奪われるが、永正元年（1504）以降は相良氏の支配下に置かれた。相良氏の支配は、天正 9 年（1581）に島津氏に降伏するまで続いた。

戦国期の芦北は、相良氏の支配下にあったため、地域に存在する中世城郭の城主の大半が相良氏の家臣と伝えられている。

この内、佐敷城と佐敷川を挟んで 1.2 km東側に位置する佐敷東の城は、「城山（じょうやま）」と呼ばれる山稜上（標高 161m）にあり、『肥後国誌』には「東ノ城迹　栫村ノ山上ニアリ城主ハ相良家臣東新左衛門同藤左衛門ト云按ニ花岡城ニ西肥前守在城ノ以前ナルヤ年代不分明栫村ハ城ノ栫ニシテ城主常ニハ城ニ不居栫ニ居テ事アルノ時ハ城ニ籠ルト云（以下略）」とある。現存する遺構から、多重の堀切を多用し、一部には畝状空堀群が導入されるなど高度な築城技術が見受けられ、相良氏の葦北郡支配の拠点城郭であると予想される。

佐敷東の城の東南に位置する宮浦阿蘇神社の本殿に伝わる神像背面には、墨書や朱漆で天文 2 年（1533）、または天文 4 年（1535）の日付とともに「大檀那藤原朝臣長唯」「當代官藤原武秀」「願主正祝橘實栄」「當城人躰藤原千代松丸」などの人名を読み取ることができる。大檀那藤原朝臣長唯は、相良家 16 代当主相良長唯（後に義滋と改名）を指すと考えられ、連記の當代官藤原武秀・當城人躰藤原千代松丸は、地頭として佐敷を治めた相良家臣と考えられる。

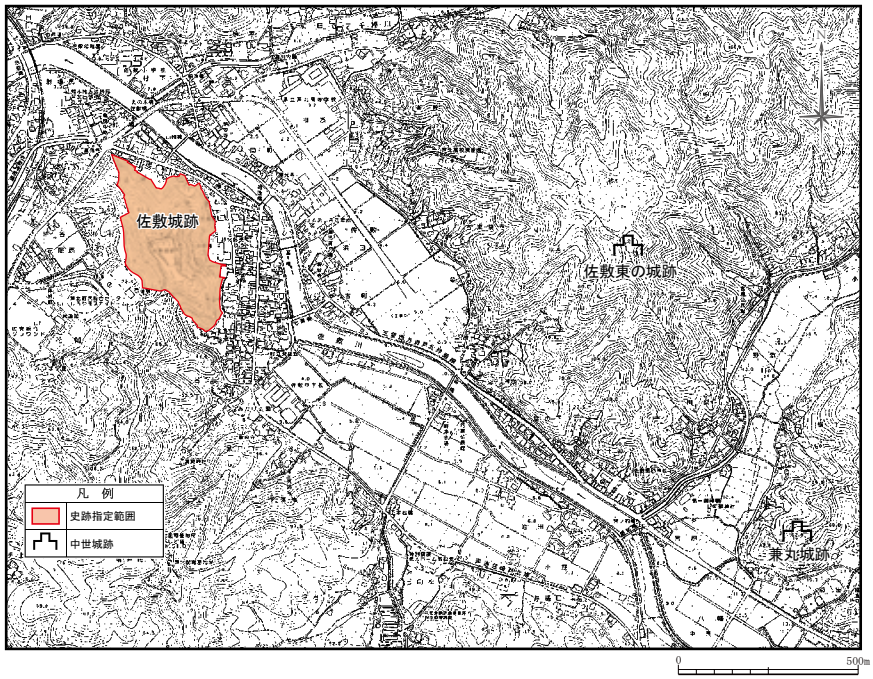


図 2-13　佐敷城跡周辺の中世城跡位置図

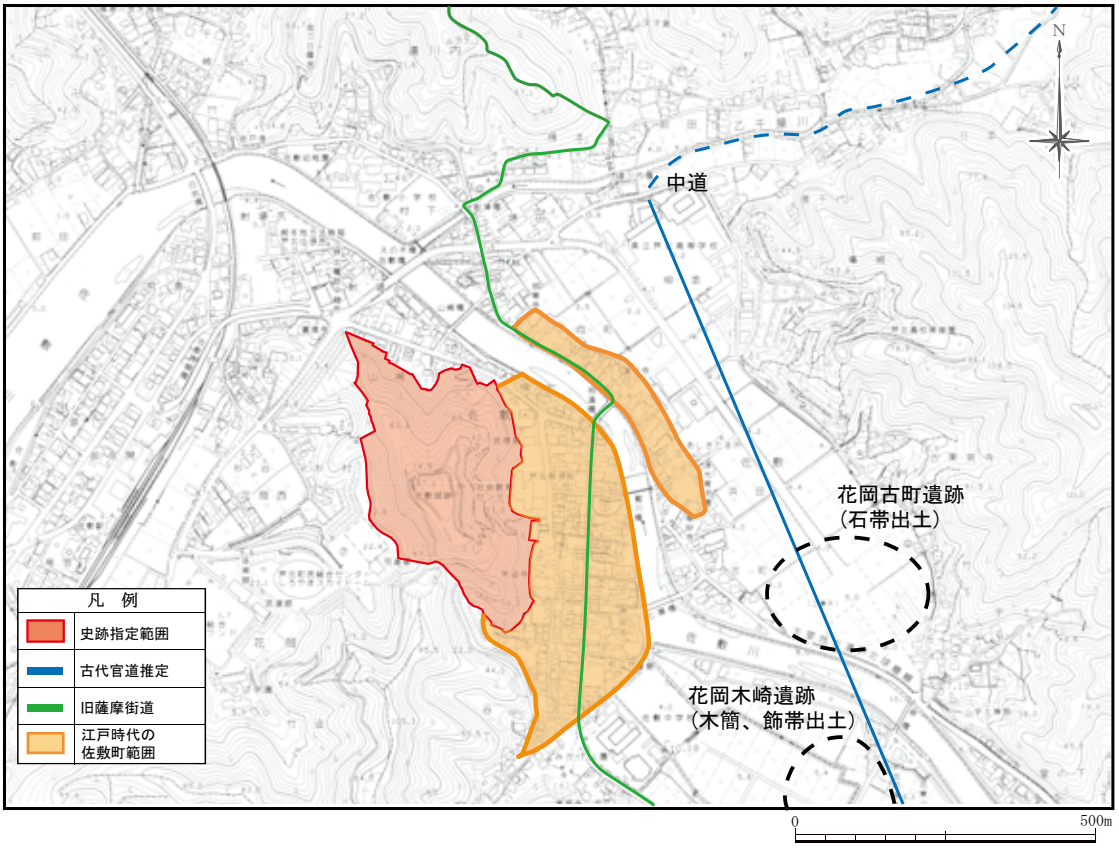


図2-14　佐敷周辺交通路の変遷図（古代～近世）

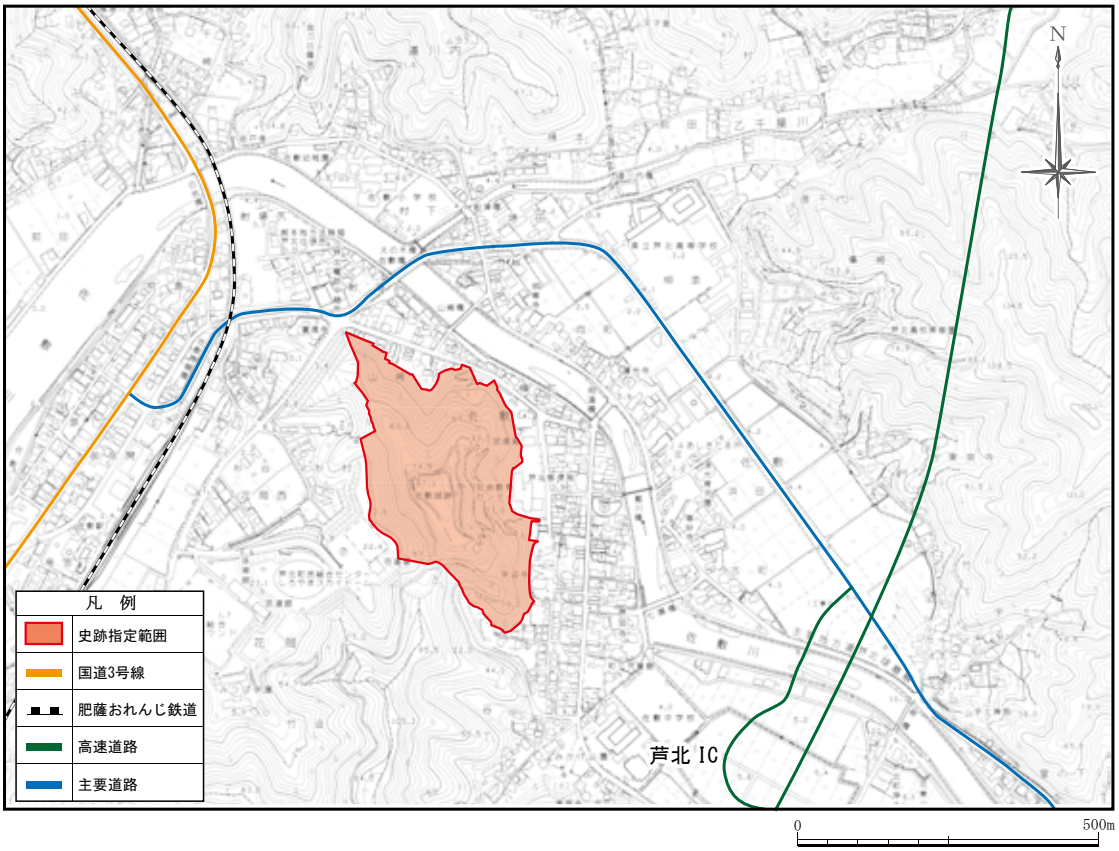


図2-15　佐敷周辺交通路の変遷図（現在）

栫集落と隣接する花岡古町遺跡では、掘立柱建物・井戸遺構とともに区画溝と推定される遺構が確認されており、輸入陶磁器・土師質土器・輸入銅銭・国産銅銭など、13 世紀前半から 16 世紀後半にかけての遺物が出土している。遺物の主体となる時期は 14～16 世紀であり、佐敷東の城及び『八代日記』に登場する「佐敷八町」「佐敷之市」との関係を知るうえで重要な遺跡である。

花岡木崎遺跡の中世の遺構面からは、11 棟の掘立柱建物や環濠を思わせる溝、土壙墓が出土しており、時期については出土遺物から 16 世紀と見られる。

戦国時代末期、島津氏の攻撃で水俣城が落城したことにより相良義陽は佐敷で島津義久と会見し、芦北郡の割譲を条件に講和を結んだ。島津氏は葦北郡各地に地頭を配置し、島津氏北進の拠点の一つとなっている。

（５）近　世

天正 15 年（1587)、豊臣秀吉による九州征伐により、肥後国は佐々成政領となったが、国人一揆の発生の責により佐々家は改易となり、加藤清正と小西行長に分割統治されることとなった。葦北郡は、佐敷を含む北部は加藤清正の飛び領となり、南部の津奈木・水俣は豊臣家蔵入地であった。

関ヶ原の戦いの際には、葦北郡一帯は西軍に属した島津氏の攻撃を受けており、島津氏の侵攻に関する記録や伝説は、葦北郡の各地に現在も伝わっている。

江戸時代に入り、元和元年（1615）の一国一城令により佐敷城は、南関鷹ノ原城・内牧城などとともに廃城となり、城は破却された。しかし、それ以後も佐敷は薩摩街道と人吉街道（相良往還）との結節点として、また芦北地方の中心港として海陸交通の要地であり続け、肥後国内や薩摩・長崎方面との交易拠点や街道筋の宿場町として発展を遂げた。熊本藩から豊後国鶴崎とともに熊本、八代など特権を与えられた 5 つの町（五か町）に准ずる町（准町）の扱いを受けるなど、肥後南部の拠点として賑わいを見せ、その様子は古川古松軒・各務支考（かがみしこう）・高山彦九郎等が記している。

寛永 9 年（1632）の加藤氏改易後、細川藩政下になると、在郷の支配体制として手永制度が設けられ、手永を管轄する惣庄屋には地方の有力者が配された。葦北郡には 9 手永（後に 6 手永に集約）が置かれたが、特に田浦・水俣両手永の惣庄屋は世襲が認められ、150 石の禄が与えられた。佐敷には惣庄屋を所管する葦北郡代（2 名）の詰所が置かれた。

軍事的には島津氏と相良氏に対する備えとして佐敷番代（御番頭）が設置され、熊本藩から派遣された藩士 25 名が番士となり、国境警備や抜け荷の取り締まりなどの任務にあたった。番代（御番頭）には 2,000 石級の重臣が任命され、番士を指揮した。また、番士の補助として郷士制度が設けられ、特に鉄砲衆である御郡筒（430 人）は葦北郡のみに配置されるなど、国境防衛上の重要拠点と位置付けられた。

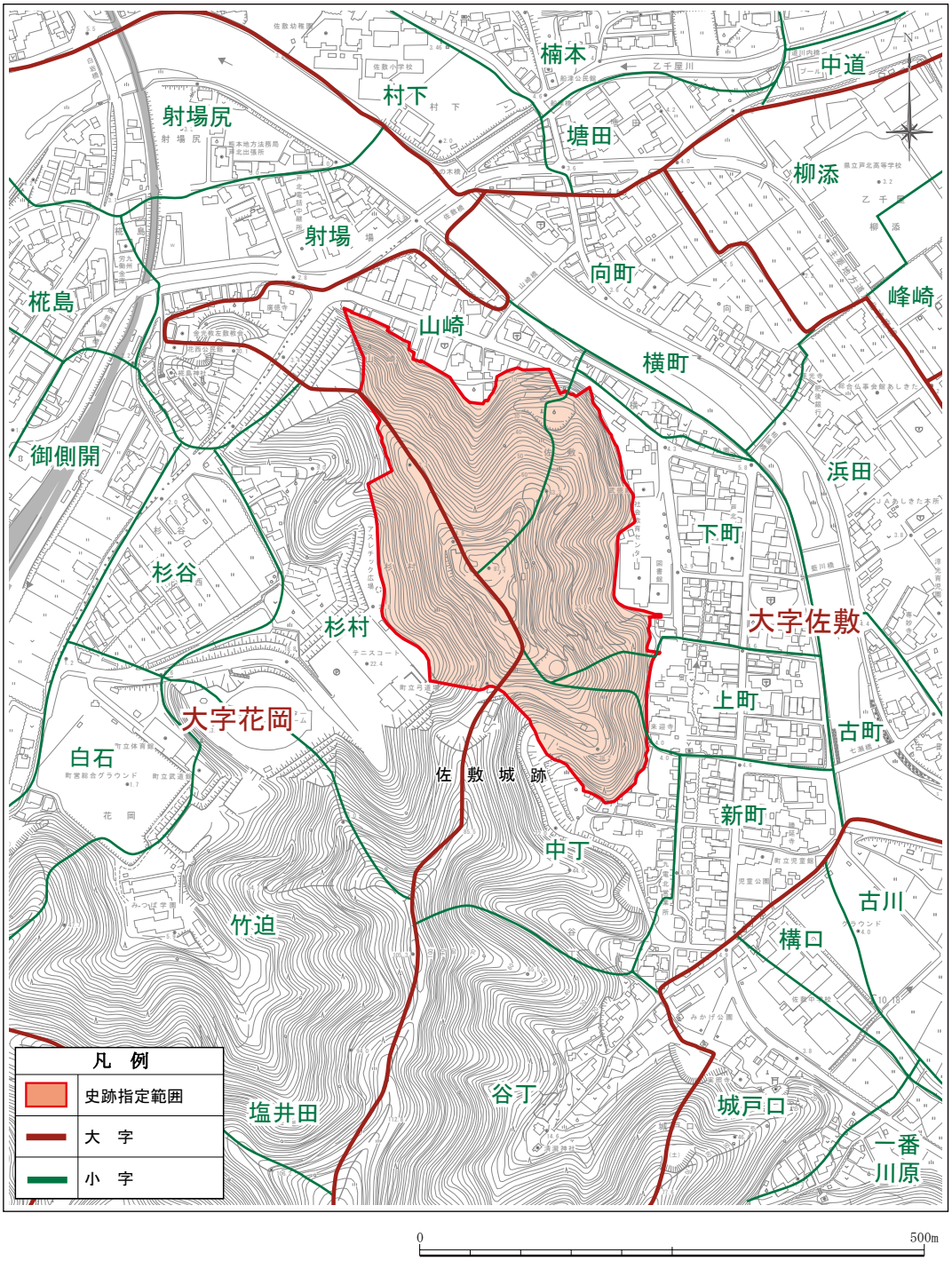


図2-16　佐敷城跡周辺字界図

（６）近代～現代

明治維新以降の藩政改革で、明治 3 年（1870）に手永制度及び佐敷御番は廃止となり、明治 12 年（1879）に葦北郡役所が佐敷に置かれたが、2 年後に八代郡と合併した後、明治 28 年（1895）に再度、葦北郡と八代郡に分離した。その後は、大正 15 年（1926）に廃庁となるまで続いた。佐敷には、警察署や郵便局、法務局といった各種行政機関や金融機関が置かれ、芦北地方の政治・経済・文化の中心であった。

明治 10 年（1877）の西南戦争時に葦北郡は一時、西郷隆盛率いる薩軍の支配下にあり、4 月 29 日に政府軍別働第 4 旅団が佐敷に上陸して以降は、佐敷周辺及び球磨川沿い、そして鹿児島県との県境に近い南部の大関山を中心とする高原地帯で新政府軍との激戦が繰り広げられ、現在も台場と称する塹壕が町内の山野に点在している。

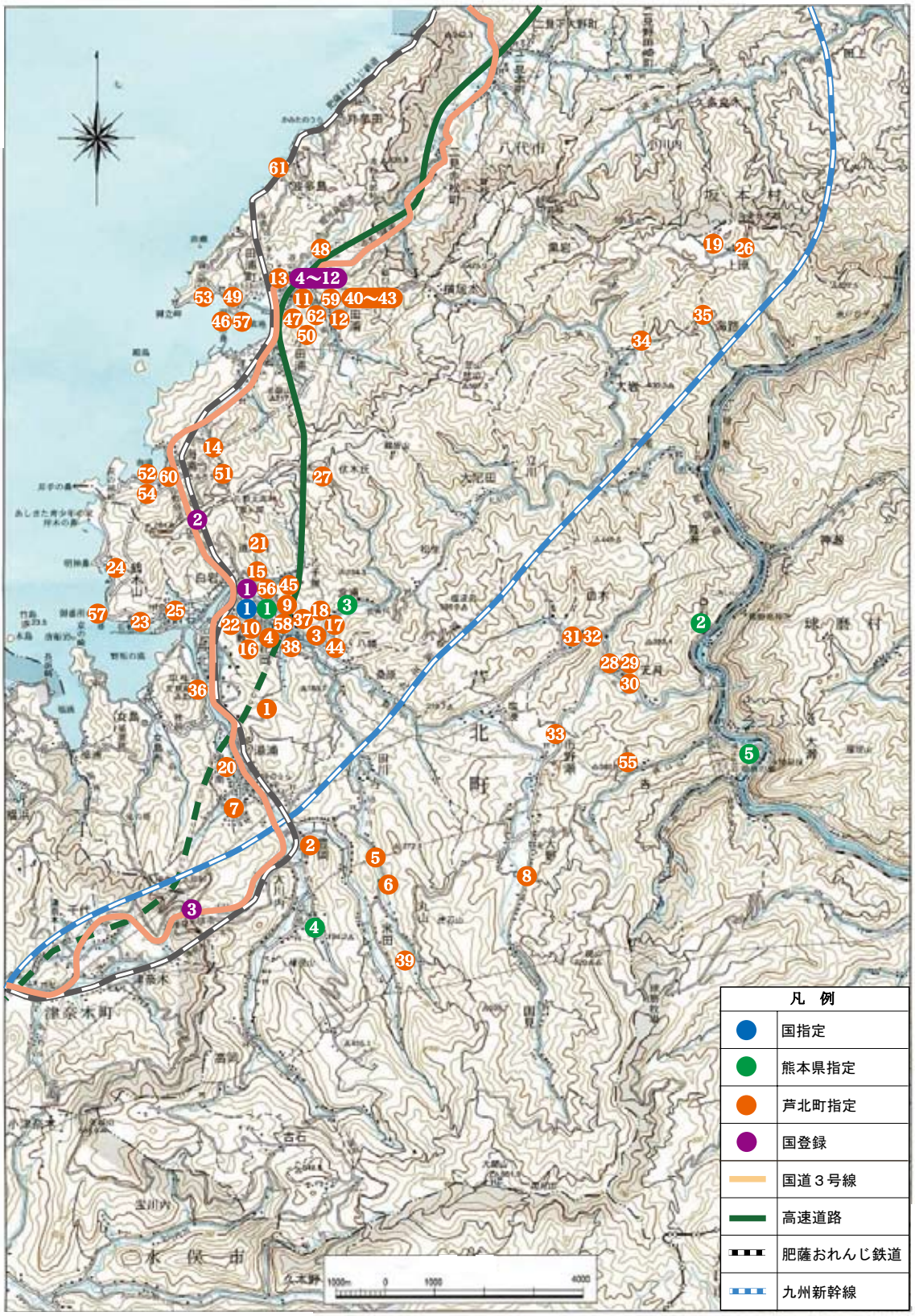
芦北地方は、起伏に富んだ地形により特に陸上交通の事情が悪かったが、明治 18 年（1885）の内務省告示第 6 号で旧来の薩摩街道は「東京ヨリ鹿児島縣ニ達スル路線」のうち、熊本以南は国道第 37 号（のち、大正 9 年に国道 2 号に、昭和 27 年に国道 3 号となる）とされ、明治 30 年代の国道工事により道幅の拡幅や隧道が整備された。道中最大の難所の三太郎峠には、津奈木太郎峠に津奈木隧道（明治 34 年竣工）が穿かれ、佐敷太郎峠には陸上道路トンネルとしては国内でも有数の規模（長さ 433.5m、最大幅 5.5m、最大高 4.4m）を誇る佐敷隧道（国登録無形文化財）が明治 36 年（1903）５月 31 日に竣工し、交通の円滑化が図られた。

鉄道は、八代―人吉を経由して鹿児島に至る路線が鹿児島本線として計画され、明治 30 年代より球磨川沿いで建設工事が始まり、明治 42 年（1909）に全線が開通した。現在、芦北町内には、南九州近代化産業遺産群の構成遺産である白石駅駅舎があり、当時の姿を留めている。

当初、海岸部は国防上の観点から鉄道路線から外れていたが、大正 15 年（1926）に佐敷駅が近世の干拓地である芦北地区に開設され、昭和 2 年（1927）に八代―出水―鹿児島に至る路線が全線開通し、鹿児島本線となった（同年、旧鹿児島本線は肥薩線に名称変更）。

水運では、佐敷港には汽船が導入され、三角・八代・米ノ津・牛深と並んで周辺の貨客集散地となっていた。

これら交通網の近代化により新たな産業が発達し、明治 41 年（1908）に日本窒素肥料（現、チッソ株式会社）が水俣で、昭和 12 年（1937）には東海電極（現、東海カーボン株式会社）が田浦で操業を開始した。これら近代化学工業企業の進出は、地域の近代化に寄与したが、後にチッソ株式会社は「公害の原点」といわれる水俣病を引き起こし、その解決と地域再生は芦北地域にとっては避けられない課題である。



※図面に図示している番号は表2-1の番号に対応

図2-17　芦北町内の文化財分布図

表 2-1　芦北町内の文化財（1/3）

国指定			
1	史跡	佐敷城跡	

熊本県指定			
1	重要文化財	「天下泰平」銘鬼瓦・桐紋鬼瓦	佐敷城跡出土。
2	重要無形文化財	肥後三郎弓制作技術（保持者　松永重昌）	
3	重要無形民俗文化財	宮浦の棒踊り	
4	重要無形民俗文化財	内野の棒踊り	
5	天然記念物	メガロドン化石群産地（※球磨村に及ぶ）	三畳紀の二枚貝。

芦北町指定			
1	有形文化財	湯治坂板碑	文明 12 年の銘あり。
2	有形文化財	音羽塚五輪塔群	文亀元年の銘あり。
3	有形文化財	宮浦神社神殿	
4	有形文化財	宝篋印搭	
5	有形文化財	瀬戸橋	
6	有形文化財	梅木鶴橋	
7	有形文化財	橋本橋	
8	有形文化財	中園橋	
9	有形文化財	専妙寺山門	弘化元年建立。
１０	有形文化財	来迎寺六地蔵搭	寛永 12 年の銘あり。
１１	有形文化財	橋本眼鏡橋	
１２	有形文化財	門口眼鏡橋	
１３	有形文化財	塩屋眼鏡橋	昭和 61 年に移設展示。
１４	有形文化財	野添眼鏡橋	
１５	有形文化財	加藤家縁者石塔	佐敷城代加藤重次の母及び妻の墓石。慶長 13 年及び寛永 14 年の銘あり。
１６	有形文化財	仁王像（一対）	梅北の乱に関する伝説あり。
１７	有形文化財	宮浦神社二四躰（随神像二躰含む）	神像。最古のものは天文 2 年の銘あり。
１８	有形文化財	佐敷諏訪神社の獅子頭	元和 5 年の銘あり。
１９	有形文化財	上原臼太鼓踊絵巻	
２０	有形文化財	細川幽斎公筆	
２１	有形文化財	各務支考筆	

表 2-1　芦北町内の文化財（2/3）

芦北町指定			
２２	有形文化財	佐敷龍	
２３	無形文化財	打瀬船	明治初期に瀬戸内地方から伝来。
２４	無形民俗文化財	鶴木山臼太鼓踊り	
２５	無形民俗文化財	計石唐人踊り	計石の漁師が対馬で習得と伝わる。
２６	無形民俗文化財	上原臼太鼓踊り	
２７	無形民俗文化財	伏木氏棒踊り	
２８	無形民俗文化財	才木棒踊り	
２９	無形民俗文化財	才木雷狂言	
３０	無形民俗文化財	才木兵糧搗き唄	
３１	無形民俗文化財	下白木棒踊り	
３２	無形民俗文化財	下白木七夕綱	
３３	無形民俗文化財	市野瀬棒踊り	
３４	無形民俗文化財	岩屋河内臼太鼓踊り	
３５	無形民俗文化財	内木場臼太鼓踊り	
３６	無形民俗文化財	平生雷狂言	
３７	無形民俗文化財	花岡北獅子舞	
３８	無形民俗文化財	花岡東獅子舞	
３９	無形民俗文化財	百木さなぶり	大正２年から伝わる農耕行事。
４０	無形民俗文化財	俵おどり	田浦地区。
４１	無形民俗文化財	棒おどり	田浦地区。
４２	無形民俗文化財	槍おどり	田浦地区。
４３	無形民俗文化財	臼太鼓おどり	田浦地区。
４４	史跡	宮浦地下式板石積石室古墳群	
４５	史跡	峰崎官軍墓地	西南戦争時、佐敷周辺の政府軍戦死者。
４６	史跡	野坂乃浦	万葉古跡。
４７	史跡	桧前家の墓群	最古のものは宝徳２年。
４８	史跡	合戦場の首塚	梅北の乱の際、当地で討死の薩将の首塚。
４９	史跡	和田厳足の墓	幕末の国学者（肥後藩士）。
５０	史跡	井上飛騨の墓	梅北の乱で活躍。
５１	史跡	薩摩往還石畳	
５２	史跡	黒田帯刀の碣	
５３	史跡	丸山古墳	

表 2-1　芦北町内の文化財（3/3）

芦北町指定			
５４	史跡	鬼塚古墳	
５５	史跡	漆川内焼窯跡	
５６	史跡	佐敷東の城跡	戦国期、相良氏時代の佐敷城。
５７	名勝	野坂浦	
５８	天然記念物	ツクシムレスズメ	マメ科クララ属、絶滅危惧ＩＡ類。
５９	天然記念物	田浦阿蘇神社のアラカシ	
６０	天然記念物	海浦阿蘇神社のクスノキ	
６１	天然記念物	出し芽の楠	
６２	天然記念物	覚応寺の雌雄のイチョウ	

国登録			
1	登録有形文化財	芦北町立武徳殿	
2	登録有形文化財	佐敷隧道	
3	登録有形文化財	津奈木隧道	
4	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）主屋	
5	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）味噌蔵	
6	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）長屋	
7	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）篭部屋	
8	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）米蔵	
9	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）表門	
１０	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）真中の門	
１１	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）下の門	
１２	登録有形文化財	藤崎家住宅（赤松館）塀	